

近年の古墳時代初頭前後の研究状況 — 対外貿易機構「博多湾貿易」と弥生時代の文字使用について —

長 直信

はじめに

「博多湾貿易」とは…

2007年に久住猛雄氏によって論じられた、弥生時代中期末から古墳時代前期までの列島外との「貿易」の変遷を朝鮮半島系土器の出土動向から検討した論文。

「博多湾貿易」の成立と解体—古墳時代初頭前後の対外貿易機構—『考古学研究』第53巻第4号

(主な内容)

- ・古墳時代前期における北部九州の対外交易上の優位性と主体性の確認。博多湾沿岸部の分業ネットワークの存在。山陰—北部九州との独自の関係などを指摘。
- ・博多湾の背後にある福岡平野の「奴国」中枢部であった比恵・那珂遺跡群は居館をもち、弥生時代終末期から古墳時代初頭には直線的な道路を備え、一定の範囲に倉庫城がさらに運河や木場の存在が想定され、古墳や方形周溝墓が並ぶ都市的「交易センター」としてこの時期大きく発展する。
- ・これらの高度な交易機構は、古墳時代前期後半～末に突如衰退・衰亡。これに連動して吉備や山陰の拠点集落の衰退、畿内でも中河内の中田遺跡群、大和の藤向遺跡群といった大集落をも衰退し、「博多湾貿易」にかかわるネットワーク全体が解体する。
- ・原因として、畿内王権が韓半島の倭国中枢において北部九州勢力などの地域勢力を介在させず、直接的に朝鮮半島諸国と交易する段階になったと考えられ、その背景には畿内王権自体の政權構造の変化やこの時期以後活発になる外ノ島祭祀に示唆される交易ルートの畿内王権による直接的掌握をみる。

要諦のテーマを紹介するにあたり、

- ① 弥生時代後期後半の北部九州勢力社会状況とその評価
- ② 古墳時代初頭前後の土器研究の重要性
- ③ 比恵・那珂遺跡群を中心とした博多湾沿岸部の遺跡動向
- ④ 弥生時代・古墳時代をめぐる文字研究の現状
- ⑤ 博多湾貿易その後と豊後とのかかわりと
- ⑥ 国家形成論と古墳時代前半期社会の評価 について触れる

【参考文献】

<一般書>

久住猛雄 2008『福岡平野 比恵・那珂遺跡群—列島における最古の「都市」—』『弥生時代の考古学』8集落からよむ弥生社会 同成社

久住猛雄 2012『奴国とその周辺』『季刊考古学』別冊18 邪馬台国をめぐる国々』雄山閣

武末純一 2019『弥生時代に文字は使われたか』『18歳からの歴史学入門』福岡大学人文学部歴史学科編

吉松大志 2018『邪馬台国から古墳の時代へ』『古代史講座—邪馬台国から平安時代まで』6(最新書)1300

田中史生 2016『国際交易の古代列島』角川選書

<展示記録>

福岡市博物館 2015『新・奴国展—ふくおか創世記—』

安城市歴史博物館 2015『大交流時代 直隴川流域遺跡群と古墳出現前後の土器交流』

1. 博多湾貿易の概要と変遷

動機—2世紀末の北部九州衰退説—

弥生時代後期から古墳時代初頭における日本列島の政治・経済の中心地が北部九州から畿内に遷移することの背景とは？

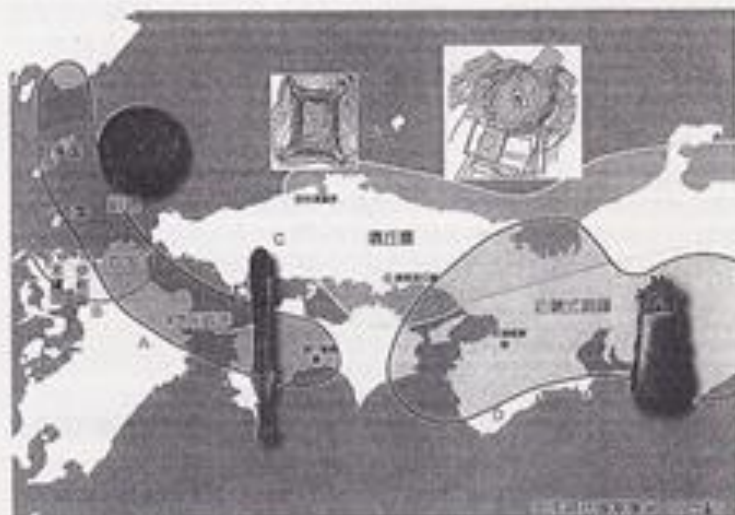
北部九州の弥生時代終末期から古墳時代前期への移行が、単純な「衰退」モデルや「ヤマト政權に

よる制圧」モデルでは説明しえない！

【通説】

後漢晩期(弥生時代後期後半～終末期)の後漢帝国の弱体化→楽浪郡の統率力の低下→北部九州の王権の衰退→「倭国大乱」→畿内中心の連合が勝利→物流機構(主に鉄)を掌握→前方後円墳体制の成立の前提(山尾幸久・都出比呂志・白石太一郎など) ←近年の考古資料に照らして妥当か？

※すでに鉄器化と鉄の流通の実態分析からは批判がある(村上恭通)



- A 近畿を中心とする成り立ちの文化圏
- B 伊勢国を中心とする畿の文化圏(伊勢国・米連野に示は前期)
- C 中国地方と北陸までの日本海側は大型墳丘墓の文化圏(北近畿を除くと非青銅器前期)
- D 近畿～東海を中心とする近畿式(三畿の畿内)の文化圏。原料はA・Bに依存。

AとBの対外交渉の主導権を巡る緊張関係やAとDの青銅器祭祀が対峙する関係は前の時代からあるが、Cは新たな動きとして注目される。この後の前方後円墳はA、Dが青銅器祭祀を捨て、B、Cの要素を組み合わせることで成立。また畿内ではDの畿内化、A(近畿)も北方後円墳の導入が早い。

図27 倭国大乱の前後 青銅器と成り立ちの文化圏(河津 2000、松本 2012、藤田 2015 等を参考に作成)

【研究視点】

- ・当時の「物資流通機構」を支える「交易」(主に長距離交易＝貿易)の実態と歴史的变化について「細かい視点」から検討を加える
- ・対列島外の長距離交易を考えるにあたって、日本列島における朝鮮半島系土器すなわち、楽浪系および三韓・三國系土器の出土動向に着目。さらに朝鮮半島における倭系土器の出土動向にも着目。
- ・搬入土器の存在→交易や様々な背景に起因した人間の移動の結果、土器が廃棄される。搬入土器が蓄積される場合、交易の拠点(「市」や交易地)の可能性が高い

1. 交易機構の歴史的変遷

- ① 「原の辻＝三雲貿易」(弥生時代後期から終末期古相 2世紀から3世紀第1四半期)
 - 主として伊勢国、そして倭国と朝鮮半島との貿易。楽浪漢人のみ伊勢国中郡に居住。韓人交易者の多くは帯域での交易まで。
 - 伊勢国王墓 平原遺跡(多量の後漢鏡群、特異な鉄器)の存在と環状土器遺跡の玉造の開始
 - 北近畿系土器が福岡平野で出土
 - 一列島各地諸勢力の対外交渉は伊勢国や倭国の拠点(三雲、比叡、淡路)で間接的に行われた可能性
- ② 「博多湾貿易(前期)」(古墳時代早期から前期前葉・IB～IIA期)
 - 福岡平野における朝鮮半島系土器の出土動向から
 - 対外交渉の場としての博多湾の重要性が増大。糸島(伊勢国)の対外交渉力の急速な低下
 - 博多湾岸の今宿・今山遺跡群で三韓系土器の増加と山陰系土器の多量出土。
 - 博多遺跡群と並ぶ新たな交易拠点か、一糸島から博多湾に交易拠点が移動。
 - 原の辻＝三雲貿易は、この時期に解体
 - 博多湾岸の砂丘等に越海性の諸遺跡が成立。
 - 畿内の「倭王権」と「倭国」勢力との特殊な関係の成立
 - ※この時期は率弥呼の外交期である240年前後を含むと考えられる。

③ 「博多湾貿易最盛期(後期)」(古墳時代前期前半・ⅡB～ⅢC期)

- ・西新町遺跡の中心地化 → 国際交易拠点へと転化
- 【ⅡA期】集落大規模化・カマドの成立・山陰系土器の搬入と在地化開始
- 【ⅡB期】遺跡数増大、カマド付き住居の増加、「布留系」土器の受容と普及
- ・韓半島系土器の集中(馬韓系が7割)、列島各地の搬入土器の集中＝対外交易の一大拠点化
- ・遺跡の担手は対応する基地である藤崎遺跡の埴田から在地系、「布留系」土器も福岡平野産のもの
- ・西新町が選択されたのは、「伊都国」と「奴国」勢力の間であるため(世界的にみた「貿易港」の原則)
- ・山陰系土器が在地産(全種類そろそろ)、搬入品とも多い
- 山陰地方(出雲勢力)の特別な通商路の存在?
- ※この時期、瀬戸内や近畿では三国系の土器は極めて少ない。
- 博多湾岸に向いての対外交易が想定され、福岡平野の勢力を通じた間接的取引
- ・比志・那珂遺跡の最盛期 → 交易センターから奴国の首都へ → 道路・古墳・瀬河・市一
- 「那珂八幡古墳」の墳形を祖型とした「那珂八幡型」古墳の北部九州各地への波及・複製群を伴った古墳祭祀も共有。
- ※畿内の大王墓と直接関係のある墳形プランは少ない。
- ・「博多湾貿易」の成立と維持は福岡平野の勢力を中心とする連合の一定の主体的関与か
- ※畿内王権の一方的干渉ではない! 比志・那珂遺跡群の勢力を中心とする<緩やかな>連合体制が存在
- 理由: 那珂八幡古墳に後続する大型墳が付添になく、福岡平野周辺の各地に権力分散か?
- ・博多湾沿岸の諸拠点遺跡での専門特化と地域経済ネットワークの形成
- 西新町遺跡: 対外交易集中(貿易港) ○今山・今宿遺跡群: 土器製場
- 博多遺跡群: 高屋棟梁の大規模竪穴 ○洲地頭給遺跡: 碧玉、水晶製玉類の製作
- ※地域内分業ネットワークを形成。地域経済だけでなく「博多湾貿易」を支える
- ※国内向けには比志遺跡群での「市」の存在が考えられる。背後に多数の農村の存在
- ※博多遺跡群の鉄器生産＝周辺地域への供給を想定。鉄器の一部は西日本各地や加耶にも搬出した可能性
- ※洲地頭給遺跡の水晶製玉類は国外向けか。加耶の諸首長墓へ
- 加耶の首長層との交渉の担い手は、畿内王権ではなく、「博多湾貿易」に関わる北部九州の首長層

④ 「博多湾貿易」の解体 (古墳時代前期中葉・ⅢA期)

2. 博多湾貿易と大分平野

古墳時代中期は、大型前方後円墳が日田盆地を除く地域で多数築造されるが、これとは対照的に、豊後における拠点集落は解体し、集落形態も激減するのである。古墳時代前期後葉から末における集落減少と断絶については、福岡平野をはじめとして吉備地域など西日本の拠点集落でも確認されている(石井 2009・松本 2012 など)。この事象については、古墳時代初頭前後にはじまる高度な交易機構であった「博多湾貿易」が、古墳時代前期中葉から後葉にかけて突如衰退・衰亡したことが一つの要因と考えられる。【博多湾貿易】にかかわるネットワーク全体が解体したことにより吉備や山陰の拠点集落や、畿内でも中河内の中田遺跡群、大和の橿原遺跡群といった大集落をも衰退することとなる(久住 2007)。

このネットワークが解体にいたる原因として、畿内王権が韓半島の加耶中核において北部九州勢力などの地域勢力を介在させず、直接的に朝鮮半島諸国と交易する段階になったと考えられ、その背景には畿内王権自体の政体構造の変化やこの時期以後活発になる沖ノ島祭祀に示唆される朝鮮半島への交易ルート上の畿内王権による直接的掌握があったとみる。その結果として以後、博多湾沿岸部は5世紀代から6世紀代の前半の間、対外交易の舞台ではなくなり、諸地域(宗像地域、筑後川中流域、有明海沿岸地域の菊池川流域など)の集落がそれぞれに対外交易の担い手として活躍する(白石、2004、辻田 2013)。これらの見解は、北部九州及び西日本各地の遺跡動態の変化と理解するうえで、非常に整合的である。

では、上記を踏まえて豊後の遺跡動向はいかに解釈されるのか。上述した「博多湾貿易」は西日本各地の遺跡のネットワーク形成のなかにおいて、豊後地域の土器は博多湾沿岸部では出さず、また別府湾沿岸部では古墳時代前期の朝鮮半島産の土器はもちろん他地域産の土器も多くはない。当該期の豊後はどのように関与したのか、もしくは関与しなかったのか。これに対して中期集落の希少さと大型前方後円墳の盛行は何を意味するか? また、そもそも近年の土器器種年表に照らして、こうした拠点集落の動向と豊後の拠点集落の動向は関係するものといえるのか。

中期における集落減少の要因 冒頭でのべたように、集落減少の大きな要因の一つとみられる「博多湾貿易」との関連について触れておく。各地域が博多湾沿岸部の勢力とどのような関係にあったか、もしくはなかったかは論証できないものの、大造遺跡群では福岡市西新町遺跡で出土する有段口縁鉢に類似する資料が存在(図 14、14)する。豊後以外の地域と比較して搬入品は少ない地域とは述べたものの、この事例は重要であり直接的、間接的にせよ博多湾周辺の遺跡動向と無関係であったとは思えない。大分川上流域にみる石銅の存在や破鏡の流入などにみるように、さまざまな文物が大小さまざまなネットワークで繋がっていることが想定され、博多湾貿易の解体にともなう余波を、土器型式一時期分程度の時差をもって玉突き式に受けた可能性は否定できない。博多湾沿岸集落における豊後系(安国寺式系の壺など)の土器の探索が必須ではあるが、古墳時代前期に存在した大小様々な太さで存在していたネットワークが途切れたことにより、豊後地域の拠点的な集落の衰退や移動等の影響があった可能性を考えておきたい。

時代区分論としての集落圏期 ちなみに、溝口孝司氏は人類史的視点より350年～550年の間に過去5000年の人類史のなかで3番目にシビアな寒冷期・乾燥期を迎えていたこと、この時期に福岡平野や岡山平野の堅穴住居数が激減していることに着目し、巨大古墳の築造と寒冷期・乾燥期が一致していることを指摘している。そしてこれらの事象を、政治史的な解釈のみにとどめず、非常に複雑な因果連鎖が想定されると断りつつ「環境劣化と、それに導かれた様々な困難に対して、人々が大規模な公共事業、ある種の強い公共性を帯びた人物、死者への顕彰への祈はずれの投資によって対応しようとしたことの流れ」ではないかとの試案をしめされている(溝口 2019)。

古墳時代中期の集落減少についての画期については自然ながら多面的な解釈があるものの、広範囲で認められる中期の集落の減少・停滞現象は西日本の多くの地域で一般的な傾向である可能性がある。溝口氏の提言を踏まえるならば、畿内の資料を中心に組まれた時代区分論に対して、地方の側からみた集落の画期は、前期と中期、中期と後期を分かつ時代区分上の要素に加えることも可能ではないかと考える。

ただし、今回改めて過時的に集落動態を見るなかで、中期はたしかに集落が減少し、人口も減っていると推測されるが、逆に弥生終末から古墳前期の異常ともいえる集落増加も浮き彫りとなる。これらについては、歴年代比定の議論をふまえた時期幅のシビアな検討が必要ではあるものの、古墳時代前期が人も物も(これには住居の建て替えの頻度が非常に高いだけという解釈の余地もあるにせよ)異常に多い前後の時代と比べ極めて異質な時代と評価できる可能性もあるように思われる。歴年代論とあわせて、追及していくテーマと思われる。

3. 弥生時代に文字は使われたか ―交易の場と文字―

①教科書では

古墳時代の応神天皇の代(4世紀末～5世紀初頭)

「王仁博士」の渡来から文字の使用始まる

・『三国志』魏書東夷伝倭人条(=魏志倭人伝)

・ 正始元年(240年)の上表文の記録

文字を解している。どこまでさかのぼるか?

武末純一: 弥生時代後半(中期後半から後期 BC1世紀～AD3世紀初頭)に列島の一部で文字が使用され、中国の銭貨が交易の決済手段に使われたとみる。

②文字使用の根拠

・韓国 茶戸里1号墓(三韓時代初期 BC1世紀)出土文房具系遺物

鉄の地金で漢や東漢と交易し、内訳を筆で記録し、削刀で文章を訂正し、代価の銭を天秤と權で計る)被葬者像が想定される。(李健茂 1992年論文)

・三雲・井原遺跡発見の石硯について

4. 国家形成論と古墳時代前半期社会の評価 について

部族社会・首長制社会・初期国家

弥生時代中期後半社会、古墳時代前期社会はどの段階か